あと10センチで出逢えるかもしれない。

Takamatsu Gushiken Digging the soil of Okinawa

戦後80年
平和について考える

骨を掘る男

Close to the Bone



監督・撮影・編集　奥間勝也

整音：川上拓也　カラリスト：田巻源太　音楽：吉濱翔　共同製作：ムーリンプロダクション、Dynamo Production　製作：カムトト　配給：東風

2024｜日本・フランス｜115分｜5.1ch｜DCP｜ドキュメンタリー　© Okuma Katsuya, Moolin Production, Dynamo Production　closetothebone.jp

ガマフヤー 具志堅隆松 70歳。なぜ40年も沖縄を掘りつづけるのか?

2025.8/10(日)　①10：00 ②14：00 ③18：00　上映時間 115 分

都城市立図書館ギャラリーB　定員/各 30 名※事前予約制・自由席

申込み方法/2 階そうだんカウンター・電話・WEB

問合せ/都城市立図書館 0986-22-0239　詳細・WEB 申込みはこちら→



具志堅さんは、湿った土の中から
残された遺骨を、遺留品を、素手で掘り出してゆく
この人は兵隊、この人はおじいさん
こっちはお母さんで、こっちは幼い子ども
土色に染まった骨のかけらをくっつけるようにして
ひとりひとりの輪郭を浮かび上がらせてゆく

そして、これは、わたしの想い及ばない人のために
名前も遺骨も残せなかった人たちのこともまた
同じように悼む

瀬尾夏美——アーティスト／詩人

具志堅隆松さんという稀有な人物を導き手に、「失われた時」を探求する記念すべき傑作。遺骨と遺影をめぐる深い思索の末、まだ映像にどんな力が残されているかが触知される。本作を見た後は、沖縄の大地の見え方が決定的に変わってしまうだろう。

三浦哲哉——映画研究者

ベルが鳴り、暗転した瞬間、劇場がガマになる。あの湿気を含んだ土の匂い。汗ばむ澱んだ空気。ひんやりした地面の感触。掬い上げられる日を待ち焦がれていた死者たちの時間が、スクリーンから沁み出してくる。具志堅さんのアンテナに同期し、観客も聞こえないはずの声を聞き、見えないはずのものを共に凝視する体験。これは映画館でしか起きない魔法だと思う。

三上智恵——映画監督／ジャーナリスト

それでも掘りつづけることを 彼は「行動的慰霊」だと言う——



沖縄戦の戦没者の遺骨を40年以上にわたり収集し続ける具志堅隆松。これまでに、およそ400柱を探し出した。砕けた小さな骨、茶碗のひとかけら、手榴弾の破片、火炎放射の跡……。拾い集めた断片から、その人の最期に想いを馳せ、弔う。掘ってみるまで、そこに本当に骨があるかはわからない。それでも掘りつづける行為を具志堅は、観念的な慰霊ではなく「行動的慰霊」だと言う。沖縄本島には今も3000柱近くの遺骨が眠っているとされる。沖縄の人びとや旧日本軍兵士だけではない。米軍兵士、朝鮮半島や台湾出身者たちの骨を含んだ島の土砂が辺野古新基地のための埋め立て工事に使われようとしている。

新進気鋭の映画作家が生まれ育った沖縄の歴史と今を見つめる
戦火と分断の時代を生きる次なる世代のドキュメンタリー

監督の奥間勝也もまた沖縄戦で大叔母を亡くした戦没者遺族である。しかし、生まれるはるか以前に亡くなった大叔母とは会ったことがない。具志堅の遺骨収集に同行し、沖縄戦の膨大なアーカイブ映像に目を凝らし、大叔母の生きた痕跡を探す奥間は、繰り返し自問する。「出逢ったことのない人の死を悼むことはできるのか?」その問いはやがて「平和の礎」に刻銘された24万の名を読み上げるいくつもの〈声〉と共鳴し、戦火と分断の時代を生きる私たちを震わせる。どうすれば遠く離れた人の痛みとともにあることができるのか? 新進気鋭の映画作家が生まれ育った沖縄の歴史と今を見つめる。









closetothebone.jp　𝕏 cttb_film